



京都大学
KYOTO UNIVERSITY

総合人間学部／大学院人間・環境学研究科

Faculty of Integrated Human Studies / Graduate School of Human and Environmental Studies

No.

73



2024.10

総人・人環 広報

特集 新任の先生方より

複数のやりかたで文学活動をめざして.....	吉田 恭子.....	3
人間・環境学をたずねて.....	霜田 洋祐.....	4
着任のご挨拶.....	森山 真衣.....	5
着任のご挨拶.....	GINSBURG Jason Robert.....	6
初心を忘れて20年.....	上杉 智英.....	7
小さな目標.....	福元 健之.....	8
京都に感じる既視感.....	三代川 寛子.....	9
“京大放牧場”にかえってきて.....	縄田 浩志.....	10
着任のご挨拶.....	田代 藍.....	11

新任の先生方より

複数のやりかたで文学活動をめざして

吉田 恭子

(大学院人間・環境学研究科 芸術文化講座
総合人間学部 芸術文化講座 (人間科学系))



今日のアメリカ文学のひとつの特徴は、クリエイティブ・ライティング・プログラムの存在に見て取れます。学生の創作した詩や小説をワークショップ形式で合評する演習をカリキュラムの核

に据えた大学院創作科は、ノーマン・フィスターら新人文学主義者によって1920年代初頭にアイオワ大学が改組された際に、史上初の「文学部」とともに誕生しました。それは当初、実際に創作をすることによって、文学の仕組みを内側から理解しよう、という実験的な試みでした。

戦後になると復員兵援護法の補助により第一世代の学生が大量に大学に押し寄せ、創作科は実作者養成の場へと変化を遂げます。そして、アイオワで学位を取得した詩人や小説家が、各地の大学で同様の大学院プログラムを開設していきます。研究手法として導入されたクリエイティブ・ライティング・プログラムは、実作者の養成のみならず、出版歴のある詩人・作家に定職を与える経済的支援の場としても、拡大を続けました。プリンストン大学教授であったトニ・モリスン、MITのジュノ・ディアス、シラキュース大学のジョージ・ソーンダーズなど、日本で名を知られている作家も大学教授としての肩書を持っています。

現在、MFA (芸術修士号) を授与するクリエイティブ・ライティング・プログラムは全米に約250、Ph.D. を授与するプログラムは約50あるとされ、毎年約3000人が創作科MFAを取得しています。毎年50人の小説家を受け入れるアイオワのライターズ・ワークショップには、約2万人がアプライするといわれています。百年のうちにこれほ

どに巨大化した文学機構がその国の文学のありようや手法に影響を与えないはずはありません。けれども創作科の戦後アメリカ文学への影響についての研究は実はまだ始まったばかりなのです。

私自身、京都大学文学部を卒業して、人間・環境学研究科のヨーロッパ文化環境論講座で1996年に修士号を取得したあとに、ウイスコンシン大学ミルウォーキー校英文科で創作を専攻し、創作作品を学位論文として提出して英文学博士号を取得しました。その後縁があって日本で就職し、慶應義塾大学、立命館大学を経て今年度より人間・環境学研究科に着任しました。

創作科での教育は私の文学に対する見方を大きく変えました。創作科の経験なしでは今の自分はいないかと確信しています。当時はそれが何を意味するのか客観的な評価ができませんでした。が、時を経るほど自分の経験の文脈化・批判的客体化ができるようになったと感じています。今では「創作科」というレンズを通した多角的作品・文学研究に、翻訳・創作・文学の場作りという実践を加えて総合した「文学活動」が私のライフワークだと言えるようになりました。

京都大学での経験も私の研究の基盤となっています。1960年代以降フランス由来の文学理論がアメリカ文学研究を席卷したというのが半ば常識のように語られていますが、実はそれは創作科の実情を無視した言説でしかありません。ワークショップでは新批評由来の精読が今も重要な読みの技法として生き続けており、これは私自身が学部と修士課程で受けた教育と重なります。

未来の大学での文学の居場所やあり方を模索しながら読み書きする日々です。

(よしだ きょうこ)

新任の先生方より

人間・環境学をたずねて

霜田 洋祐

(大学院人間・環境学研究科 芸術文化講座
総合人間学部 芸術文化講座 (人間科学系))



2024年4月に総合人間学部、人間・環境学研究科に着任しました。京都大学には、二十年あまり前に学生として入学して以来、大学院を修了した後も、昨年度まで非常勤講師として所属していました。前任校の大阪大学

外国語学部にも京都市内から通っていたので、大学にも京都の町にも慣れています。それでも、吉田南キャンパスに自分の研究室があるのは不思議な感覚で、まだじっくり来ていません。フレッシュな気持ちを楽しんでいるところです。

私の専門は、イタリア近代文学です。西欧諸国のなかでは小説の発展が遅れたイタリアの、19世紀の小説について、主に語りの手法の観点から研究してきました。何が語られているかという主題の問題より、どのように語られているかのほうに関心を寄せるので、語用論や修辞学(レトリック)などと相性がよく、文学研究界隈では言語学っぽいことをしているとされることもあります。言語学を専門とする人には当然、文学プロパーと見られます。主な研究対象としてまず選んだのが、イタリアでは誰もが知っている大作家アレッサンドロ・マンゾーニの名著『婚約者』(イタリア文学では小説のなかの小説)だったため、なかなか他の作家の作品にまで手が回らず、守備範囲も狭い。そのため、「学術越境」とは縁の薄い、総人・人環らしくない人材と思われるかもしれません。

「総人・人環らしさ」については、私自身も着任前から考えを巡らせてきたのですが、なかなか掴めません。でも、先日、新しく作った名刺を渡した相手の反応、異なる二つの反応を見て、気がついたことがあります。一つは、学界からは遠い方からの「人間・環境学を研究されているんですか?」という素朴な問い。これに対して、はじめ

に思ったのは「人間・環境学は研究していないし、教えてもないなあ」ということでした。正確には「自分ひとり」ではとても無理だということでしょうか。軽やかに学術越境している同僚の先生方もおひとりずつで人間・環境学を担ってはいないでしょう。総合人間学も。

もう一つは、反対にかなり事情に通じている方からの「あれ、人環でイタリア文学を教えている人はこれまでいましたっけ?」という問い。そう、総人・人環において「イタリア学」の存在感は決して小さくないのですが、「イタリア文学」を専門とする専任教員は私が初めてです。前任者がおらず明確なモデルもないからこそ、「総人・人環らしさ」が気になるのですが、研究科としては、これまでなかった(あまりメジャーではない)分野が加わったわけですから、多様な専門分野の教員・研究者がいるという特性を少し強めたことになるのかもしれませんが。そう思うと少し気が楽になるので、そう思うことにしましょう。それに、イタリア文学という分野においては、どの時代を専門にするにせよ、中世文学以来の伝統をおさえておくことが望まれます。これを教員として新たに一人で担当するということは、潜在的には、ダンテ『神曲』の宇宙観とか、ルネサンスの巨匠ミケランジェロの詩とか、科学者ガリレオの対話篇なども学生とともに学ぶ必要があるということです。イタリア文学はなかなか「総合人間学」かもれません。

というわけで、私自身が一人で総人・人環らしくなくてもよいだろうとひとまず納得しつつ、「イタリア語」というルネサンス以前からあまり形を変えていないがゆえに諸学問・諸文芸の歴史と直に関わりうる言語を軸に、同僚の先生方、学生の皆さんとともに総人・人環らしい教育・研究に携わってゆけたらと考えています。

(しもだ ようすけ)

新任の先生方より

着任のご挨拶

森山 真衣

(大学院人間・環境学研究科 認知・行動・健康科学講座
総合人間学部 認知・行動・健康科学講座(認知情報学系))



2024年4月に認知・行動・健康科学講座に着任いたしました。私自身、総合人間学部、人間・環境学研究科の出身であり、総合人間学部に入學して以来、昨年度までは本學に學生として通っております。大変お世話

になった本学部および研究科に、今度は教員として少しでも貢献できる立場に立てたことに、喜びとともに身の引き締まる思いです。

私は、ヒトの運動制御や運動学習を専門としています。ヒトの身体の状態は、怪我や疲労、発育や加齢といった要因によって絶えず変化しています。さらに天候や風、地面の状態など、私たちの周囲の環境も一定ではありません。しかし、そうした変化に対して特別に意識することなく、私たちは自由に身体を動かし、日常の活動を行うことができます。これは、脳が無意識のうちに環境に適応し、その場に合った運動を学習しているからです。私は、このような「変化する環境に合わせて運動が学習される仕組み」についての研究に取り組んでいます。

改めて振り返ってみると、こうして運動に関する研究を行っているのは、総合人間学部に出会ったことが大きな転機だったと感じます。私は高校3年生の頃、将来なりたい職業や明確な進路が決まらず、どの学部を志望するか悩んでいました。そんなときに総合人間学部の存在を知り、理系・文系の枠を超えて幅広い分野に触れる機会があることに魅力を感じ、志望しました。入学してみると、一つの学部の中で想像以上に多様な分野が存在することに驚きました。さらに、それぞれの学

生がさまざまなバックグラウンドを持っており、彼らと交流する中で、自分の興味や考えが決して当たり前ものではないことを学びました。こうした経験が、自分の視野を広げ、自分自身が本当に興味を持てるテーマを見つける大きなきっかけとなったと感じています。

私はもともと幼い頃から体を動かすことが好きだったこともあり、運動に関連する分野に興味を持ちました。総人に入ってから、その興味がさらに強まり、最終的に運動制御や学習に関する研究を始めることになりました。研究を通して、ヒトの優れた運動制御のメカニズムに触れるたび、これほど複雑な制御を誰もが当たり前に行っていることに日々驚かされます。

学生の皆さんには、総人・人環で過ごす時間を通して、自分の純粋な興味を存分に追求してほしいと願っています。総人・人環には、多種多様な興味関心を持つ学生が集い、互いに刺激を与え合える環境があります。さらに、それぞれの先生方が専門とされている研究は実に多様でどれも大変興味深く、きっと皆さんが心惹かれるものがあるのではないのでしょうか。自分が心から面白いと感じるものを見つけることは、今後の人生を豊かにしてくれる糧となります。どのような進路に進むかに関わらず、自分自身の興味を探り、好奇心と素直に向き合い、ぜひ多くの経験を積んでもらいたいと思います。

未熟な点も多々ありますが、先生方や学生の皆さんとともに、自分の興味を探究する楽しさを共有しながら、総人・人環らしい学びの場を築いていけたらと考えています。どうぞよろしくお願いたします。

(もりやま まい)

新任の先生方より

着任のご挨拶



2024年4月に大学院人間・環境学研究科言語科学講座に着任しました。言語学と英語関連の授業を楽しみつつ、担当しています。

アメリカ（ワシントン D.C.）出身の私と日本との関わりの始まりはアメリカにある大学の学生として京都へ留学した経験でした。京都の綺麗な風景、魅力的な文化財、美味しい食べ物などに惹かれました。大学を卒業後、3年間ほど関西で英語講師として働きました。英会話の仕事にそれほど魅力を感じませんでした。英会話を教えることを通して、言語の不思議さを意識し始めました。生徒の英文法に関する質問に答えられないことが多く、正しい英語を分かっているのに英語の仕組みについて何も分かっていないことに気づき、その英語はなぜ正しいのか、なぜ間違っているのか説明することができませんでした。

言語についてもっと知識を得るため、アメリカ（ワシントン D.C.）にあるアメリカン大学の修士課程に入学し、英語非母語話者に対する英語教育について学びました。英語教育より言語学の方が面白くて、その後、アリゾナ大学（米国アリゾナ州ツーソン市）の言語学科博士課程に進み、言語学理論の基礎を学びました。また、コンピュータを使って言語を操る、そして言語について調べる方法も学びました。博士論文では、多くの言語の疑問文の構造を言語学理論の立場から研究し、分析しました。

博士課程を修了後、福島県にある会津大学で3年半働き、その後、大阪教育大学で11年間務め、

GINSBURG Jason Robert

（大学院人間・環境学研究科 言語科学講座

総合人間学部 言語科学講座（認知情報学系）

言語学関連や英語関連の授業を担当しました。教育と研究に力を入れ、積み重ねてきた経験と知識を京都大学で活かそうと思います。

人は問題なく、深く考える必要なく、基本的に誰でも正しく母語を使用できます。しかし、常に使用している言語の構造や実際の文法を人は基本的に意識していません。私は人が常に使用している言語の仕組みを言語学の研究を通して解明しようとしています。特に、私たちが毎日使用している文の構造はなにかを知りたいです。

言語を解明することに当たり、私は最新の言語学理論に基づいて、コンピュータモデルを作成しています。このモデルを利用することにより文（主に英語や日本語）の構造を示すことが可能です。このコンピュータモデルは言語学理論に基づき、完成した句・文を自動的に生成し、作り上げる樹形図をウェブページに表示します。私が構築しているコンピュータモデルは一つの理論で構文の生成過程の全ての段階をアウトプットとして算出するため、理論の細かい部分や問題点を理解することが可能になり、人間の使用する言語をより深く理解することに貢献しています。

言語学の研究を続けると自分の無知さには常に対面する必要があります。毎日のように、非常に簡単そうな文の構造について分からないことが多くあります。京都大学で言語の解明を目的としながら、学生の言語に対する知識を深めたいです。皆さんが無意識に使用している言語はどんなものであり、どのような構造があるかなど考えさせることを目的としながら、京都大学に貢献したいと思います。

（ギンズバーグ、ジェイソン ロバート）

新任の先生方より

初心を忘れて 20 年



2024年5月より東アジア文明講座の准教授として着任しました。本務では独立行政法人国立文化財機構 京都国立博物館に勤務し、研究員として書跡の作品担当をしております。専門は書誌学・

文献学で、特に仏典を対象としてテキストの変遷過程を検証しています。

出身は山口県で浄土真宗のお寺の長男として生まれました。特に深く考えることなく宗派の大学である龍谷大学へ入学し、宗祖である親鸞の思想を学んでいました。浄土宗の法然や時宗の一遍、日蓮宗の日蓮や臨済宗の栄西、曹洞宗の道元といった鎌倉時代の祖師達の中でも、親鸞はとりわけ直筆の史料が多く伝わっています。思想を研究する上で直筆の史料が数多く残っているというのは非常に利点な訳ですが、いかんせん当時の自分は鎌倉時代の古典籍を読む、実物に触れるという機会も知識も持ち合わせていませんでした。そんな折にある研究会で華頂短期大学の落合俊典教授に出会いました。先生は当時、名古屋の七寺に所蔵される平安時代に書写された仏典を調査し、既に失われたと考えられていた経典を発見され注目を集めていました。幸いにもこのご縁により大阪の金剛寺の調査に参加させていただき、鎌倉時代に書写された古写経に触れる機会を得ることができました。また、調査に参加されていた京都国立博物館の赤尾栄慶先生より古写経の取り扱いについて細やかな指導を受けることができました。やがて、落合先生は華頂短期大学から東京の国際仏

上杉 智英

(京都国立博物館 学芸部美術室主任研究員
大学院人間・環境学研究科 東アジア文明講座)

教学大学院大学へ移られるのですが、自分もそちらに編入し、引き続き古写経について学びました。また、中国人民大学へ高級進修生として1年3ヶ月留学し、近所の国家図書館へ通い、敦煌で発見された写本の調査などを行いました。単位取得退学し、同大学の日本古写経研究所に研究員として勤め、大阪の金剛寺・京都の興聖寺・名古屋の七寺に所蔵される古写経や、愛知の岩屋寺に所蔵される版本大蔵経の調査・撮影・研究に従事していましたが、2017年に京都国立博物館へ就職し、13年振りに京都へ戻ってきました。2023年には親鸞の生誕850年ということで特別展「親鸞—生涯と名宝」を担当しました。「こんなことになるのなら、もっと親鸞さんのこと勉強しとけば良かった」という後悔と共に、「そうだ、自分は親鸞さんに直筆史料が多く残っているから、古典籍について学ぼうと思ったんだ」と、すっかり忘れていた初心を20年振りに思い出し、特別展では可能な限り親鸞の直筆史料を集め展示しました。

博物館の展示品の中で、書跡は残念ながらあまり人気のある分野ではなく、中でも仏典・お経となるとなおさらです（個人の感想です）。しかし、日本の平安時代・鎌倉時代に書き写され数多く伝わっている仏典は、中国の宋時代に発達した印刷技術により流布した版本よりも、古い時代の本文内容を伝えている事例が多く報告されており、近年、世界中の研究者に注目されています。博物館の短い題箋ではなかなか伝えることの叶わない、日本の仏典が有する魅力を講義で一人でも多くの人に伝えることが出来れば幸いです。

(うえずぎ ともふさ)

新任の先生方より

小さな目標



2024年4月に共生世界講座に着任いたしました。その前は、3年間、福岡大学人文学部歴史学科に奉職しておりました。前任校は、入学時から学生の専門は固定され、また学科会議も毎月開催されていまして、人環・

総人とのギャップに当初戸惑いましたが、少しずつ慣れてきたように思います。

ある日ふと考えたのは、私が前期の全学共通科目で担当した西洋史Iには、半期で2コマ、それぞれ100人程度の受講者がいます。1988年生まれの私は、65歳定年だと、2053年度まで働けますので、ちょうど30年働き続けたとして、 $100人 \times 2$ (半期のコマ数) $\times 2$ (前期と後期) $\times 30$ (勤務年数) = 12,000人に対して授業をすることになる計算です。一万人を超える京大生に教えることは、それなりに名誉なことのように思えますので、とりあえず教養の授業では、一万人を目標にしようと思います(…できたら、受講者数ではなく、単位を与えた人数で、一万人がいいのですが)。

近代フランス史の某大家で、かつて1980年代に教養で教鞭をとられた先生は、自分の京大での西洋史の講義には400人いたとおっしゃられていました。私の聞き間違いか、あるいは先生の“誇張”かもしれませんが、私立大学の講義室でも、400人というのはものすごい数に思えます。しかし、阿部謹也や二宮宏之、良知力、川田順三といった人びとを中心に、いわゆる社会史がブームになっていた当時を考えるとありえそうな受講者数で、学生たちにとって西洋史がもつ魅力はいまよりも高かったことを窺えると同時に、現在との落差を痛感します。身近なところでも、今年の6月には、某音楽グループがコロンブスというタイトルで作

福元 健之

(大学院人間・環境学研究科 共生世界講座
総合人間学部 共生世界講座 (国際文明学系))

成したMVに批判が高まり、公開停止となりましたが、そこにどのような問題があるのかも、西洋史の知識があればわかったはずなのになあ、と残念な気持ちになりました。

だいぶん変わりつつあるものの、いまの日本の高校までの歴史教育では、コロンブスは単なる「新大陸の発見者」としか教わらず、多くの先住民を殺害し、搾取したことや、その後のヨーロッパによる植民地主義の先駆者として記憶されていることまでしっかりと習いません。なんでも詰め込むような教育はやめて、むしろそういう問題こそ教えるべきなのではと常々思うのですが、歴史教育に関する高大連携の活動に関わる中で、高校生のために扱える素材には多くの制限があることを知りました。要するに「過度に」センシティブなものは扱えないのだそうで、結局のところ、大学には、そういう内容を教える場が期待されているようです。大学の授業でも適切な配慮が必要であることはもちろんですが、国際社会の中で通用する知識や教養を提供することは、とても大事な役割です。採点とかいろいろ大変そうなので、400人はさすがにちょっと…と思いますが、それでもなるべく多くの学生に、西洋史の面白さを伝えられるように尽力いたします。

あ、専門はポーランド近現代史で、今一番関心があるのは、結核治療にサナトリウムでは自然の太陽光が利用され、都市部では「人工太陽光」(紫外線ランプ)が使われていたことをめぐる医療史です。学部や研究科の講義では、その時々で自分が研究していることをライブ的に還元するように試みるつもりです。また、演習は、各自の関心に沿って研究を発展させられる場にしたいと思います。

何卒よろしく申し上げます。

(ふくもと けんし)

新任の先生方より

京都に感じる既視感



2024年4月に着任しました。前職は東京外国語大学で、主専攻語としてのアラビア語を担当していましたが、京都大学では初修外国語のアラビア語を担当しています。これまでずっと関東を拠点

としてきており、京大に所属することも京都に暮らすことも今回が初めてなので、古都京都の名所旧跡ならびに様々な伝統行事、祭礼、行事食などを、ほぼ観光客目線で楽しんでおります。

専門はエジプトの近現代史で、特にエジプト土着のキリスト教徒であるコプト正教徒とエジプト・ナショナリズムの関係に関心を持って研究活動を続けてきました。博士論文では、19世紀末から20世紀初頭の独立運動の時期にコプトの知識人が展開した文化的エジプト・ナショナリズム思想・運動に焦点をあてました。その後、コプト正教会のサブサハラ諸国における宣教活動の研究に着手して数年になります。ムスリムが多いアラビア語圏の研究をするにあたって、どういうわけか宗教マイノリティであるキリスト教徒に関心を抱いてしまうあたり、少しへそ曲がりなのかもしれません。

なぜアラビア語に関心を持ったのか質問されることがよくありますが、明確な契機があったわけではなく、自分でもはっきりとはわかりません。漠然と古代文明揺籃の地としてエジプトやメソポタミアに憧れのようなものを抱いていたところに、右から左に書く摩訶不思議なアラビア文字に

惹かれ、好奇心に従って学び始めたらここまで来てしまったという感じです。

留学先はエジプトで、学部と大学院の通算で5年くらいカイロに滞在していました。その間に、2011年の「アラブの春」の混乱を経験し、安全確保のため日本に戻ってきたら今度は東京で東日本大震災を経験しました。当たり前が続くと思っていた、平和で安全で安定した生活がいかに脆いものであるか実感した出来事でした。

その数年後、どうにかこうにか博士論文を執筆した後、ポスドクとしてオックスフォード大学に1年半在籍しましたが、今になって思い返すと、京都という街はオックスフォードに似ているように思います。街の中で大学の存在感が大きく、学生が多いので若い活力にあふれている一方で、街全体に歴史と伝統を重んじる気風があり、古いわれのある老舗がこともなげに営業していて新参者を驚かせ、その割に街自体はコンパクトで市民の足は市バスと自転車、日が暮れるともう真っ暗……。京都に住み始めて既視感を覚えた点でした。また、これは京都大学というよりも総人・人環の特徴だろうと思いますが、多様な専門分野の研究者が同じ部署に所属しているという点も、どこかオックスフォード大学のカレッジに通じるものを感じます。学術越境、学際研究というと少し身構えてしまいましたが、まずは日々の異分野交流を大切にし、そこから育まれるであろう新たな視点を研究・教育活動に活かしていけたらと思います。これからどうぞよろしく願いいたします。

(みよかわ ひろこ)

新任の先生方より

“京大放牧場”にかえってきて

縄田 浩志

(大学院人間・環境学研究科附属学術越境センター
大学院人間・環境学研究科 共生世界講座(兼務))



“京大は放牧場のようなものだ、ウシがどこかに行ってしまうとわからない”と言う先生が以前いた。今月開催された「多様性と持続可能性——責任ある研究評価と大学改革の課題」パネルディスカッション¹⁾のなかで、あるパネラーの先生がそう言われた。詳しく

知りたい気持ちを抑えきれず、その日のうちにメールで感想をお伝えして質問もさせていただいた。とても魅力的な例えをされた先生のお名前を教えてくださいと同時に、京大界限ではよく知られた話でもあるとうかがった。

実はわたしは牧畜民研究をずっと続けてきたものであると名のつたうえで、その観点からまさに「我が意を得たり」といった感想をもったことをお伝えして、(人格を最大限に認め、同じ地平で向かい合う、三高時代からの伝統にならって)議論をふっかけた。「牛舎で(特定の分野・費目に限定して)まぐさを与えられて(校費を与えられて)機械で搾乳されて(冷たい指標でもって)どれだけ乳をだすか(何本のIF付き論文をかくか)といったような、柵が張りめぐらされ行動が規制される環境は耐えきれない。やはりいつでも自由に自分で食べる植物は決めたいし、それは場所により季節により異なる旬のものがおいしい。何といても家畜の価値は、乳生産量や肉質が優れているといった食料源にとどまらず、糞を燃料としたり、移動や運搬手段として使役したり、皮革を水袋やテントの素材とするなど多面的な利用にあてることができる点にある。また複数の家畜種と一緒に放牧されることが多いのは、採食する植物種の異なる家畜を組み合わせることで、より多くの植物種を効率的・安定的に利用するためである。そして興味深いのは、毎日、家畜とともに暮らしている熟達の牧夫(指導教員、部局長)は、ちゃんと

全てのウシはどのあたりにいるか知っているし、一頭一頭に名前をつけていることである。ウシ自身も名前を認識していて呼びかけられればその名前に反応する(「ウシに話しかける人々——スーダン東部ベジャ族の音声による家畜管理」『人環フォーラム』2号、1997年)。さらにウシ以外のラクダ、ヤギ、ヒツジなども調べてみると、同じ目的(例えば、水を飲め)でも家畜種ごとに牧夫の発する音声は異なっている。したがって、柵があるかどうかにかかわらず、牧夫はしっかりと家畜管理ができるので、放牧されているウシがまったくどこにいるかわからない、といったことはないのでは…」という感想をお伝えした。

こんな生意気なことを言い放った、かく言うわたしは実際どうであったかという、どこに行くか自身でもわからない迷える子ウシでしかなかった(苦笑)。いや、育った放牧場よりも、いろいろな草があって、おいしい水にも恵まれ、もっと働かざるを得ない居場所を求めて、移動をいとわずに探求の旅を続けてきた。でもふるさとに勝る放牧場は現在、どうも日本にはないようだと感じるようになってきた…。京大放牧場にかえってきた今だから、振り返ってそう考えてしまうのかもしれない。

この半年、なじみ深い人環まきばの心地よい微風を満喫している。でも、もしかしたらすぐ、天気は大荒れとなり、干ばつが襲ってくるかもしれない。嵐の予兆を嗅ぎわけつつ、この地であと10年楽しく、京都にしか沸き出でない名水を味わいつくそうと決めている。

明日、大学院科目「学術越境研究計画I」の担当教員として“そこに学術越境の道があった——社会にとって自分にしかできないことはあるか”と題して話題提供をする。さて、京大放牧場から出て行って20年かけて戻り着いた老ウシが、自身の足跡を示しながら、越境することの醍醐味を、若ウシにどう伝えることができるのか。

(なわた ひろし)

1) 2024年10月8日「多様性と持続可能性——責任ある研究評価と大学改革の課題 Diversity and Sustainability:Challenges for Responsible Research Assessment and University Reform」京都大学芝蘭会館2階山内ホール、KURA(京都大学学術研究開発センター)・L-INSIGHT(世界視力を備えた次世代トップ研究者育成プログラム)共同開催、大学関係者対象

新任の先生より

着任のご挨拶



2024年6月に着任いたしました。

私の専門は健康地理学ですが、分野を跨いで災害疫学、自然管理学等の超学際的な領域で研究を行っています。具体的に、

自然災害や気候変動に脆弱な地域を対象に、都市の自然環境の変化と生活者の心身の健康状態について、人と環境の健全性（プラネタリーヘルス）の観点から研究をしています。

私は宮城県の出身です。「海風」と三陸海岸に向かって吹く強く冷たい風、「やませ」の影響で比較的夏を涼しく過ごしてきた自分にとっては、京都の湿気と暑さは厳しいものです。京都の気候風土について、清少納言は「夏は世に知らず暑き」と書き著しましたが、現代の40℃近くまであがる暑さは、清少納言も想定外だったのではないのでしょうか。近年、年々増加する高温日数・猛暑日数、熱波やヒートアイランド現象、フェーン現象は、都市化の影響もあわせて、私たちの健康に負の影響をもたらすことが懸念されています。たとえば、高温によって熱中症や睡眠不足のリスクが高まるのがわかっています。また、極端な気象現象後の、うつや不安障害、自律神経の乱れ、ストレス増加などのメンタルヘルスが悪化することもわかってきました。

私の研究では、気候変動によって引き起こされるさまざまな気候危機に対する心身の健康リスク

田代 藍

(大学院人間・環境学研究科附属学術越境センター)

への対応策・適応策を探っています。方策としては、自然共生の観点から、自然を基盤とした解決策（Nature-based Solutions: NbS）を検討します。NbSに関し、2050年までに「自然と共生する世界を実現する」というネイチャーポジティブの目標があります。この目標では、気候危機や健康リスク等の課題に順応的に対処し、生態系の保護・回復、持続可能な管理といった自然共生社会の実現が期待されています。これに対し私の研究では、主に時空間地理解析により、どこでどんな気候危機による健康リスクのポテンシャルがあり、その緩和・予防資源としてどこでどんな自然資源が活用可能か、複雑な地理的データセットから時空間パターンの把握と高度な予測を出力します。個別の地域ごとの気象傾向や土地利用変化を特定し、気候変動の種類別による健康リスク指数の開発と空間的探索を行います。加えて適合モデルから今後の街づくりデザインの提案等、地理情報にもとづく政策者の意思決定支援までカバーできるよう研究を進めています。

プラネタリーヘルスの研究は、まさに学術越境を駆使してなしえる新領域だと強く信じていますが、人間・環境学研究科ではなじみのない研究領域であることも痛感しており、今後、学術越境センターの教員として、学術越境プロジェクト活動等を通して、より多くの教職員、学生の皆様にご理解とご関心をもっていただけるよう精進していきたい所存です。

(たしろ あい)

総人環

編集後記

◆『総人・人環広報』第73号をお届け致します。今号では、新しくお迎えしました9名の先生方からのメッセージを掲載致しました。様々な分野の方々のメッセージを拝読いたしまして、総人・人環を構成するメンバーが実に多様であること、この組織が非常に多くのポテンシャルを秘めていることを再認識いたしま

した。同時に自らが新任として出身学科に着任いたしましたときの期待と不安がないまぜになった気持ちを思い出すこととなりました。

新型コロナウイルス感染症の問題が一応落ち着いたと思われる現在、これからの総人・人環が、組織内での交流はもちろんのこと、国内外の多くの方々との交流を通して益々の発展を遂げていくことを心より祈念いたします。

(S. H.)

総合人間学部
人間・環境学研究所

広報委員会